

王巍：中国東北地区経済史と第5次勃興のチャンス



2017年3月29日、遼寧省政治協商會議は経済界の委員80名余を組織し、瀋陽の産業金融博物館を見学するとともに、「東北経済の歴史と未来」を主題とするセミナーを開催した。中国金融博物館（集団）王巍理事長は「東北地区経済史と第5次勃興のチャンス」と題して講演した。夏徳仁・遼寧省政治協商會議主席、潘利国・瀋陽市人民代表大会常務委員会主任らトップが参加し、李樹民・遼寧省政治協商會議秘書長が進行を務めた。夏徳仁主席は王巍氏の講座を高く評価し、このような独自の視点から東北地区の現在の問題を分析したことは極めてユニークで、多忙な中で王巍氏が帰郷講演したことは、故郷と東北地区への高度な重視の現れである、と賞賛した。この会議と講座は、遼寧省テレビ局により放送され、社会の注目を広く集めることとなった。

（以下は王巍理事長の講演録）

今日は私にこのような機会を下さり、ありがとうございます。特に、夏徳仁主席、潘利国主任には当博物館への3度目のご来訪ありがとうございます。またご在席の遼寧省政治協商會議委員の皆様は、遼寧省経済を支える屋台骨ですから、当博物館においでになることを心待ちにしていました。開館からまだ1年になりませんが、これまでの来館者は3万8千人に達しました。我々は瀋陽市和平区の支持を得て、2ヶ月で博物館開館にこぎつけたのです。まだまだ粗末な状態ですので、これから皆様のご協力を得ながら、一緒に充実させていければと思っています。

さて、多くの人々は東北地方の歴史をよく知りません。今、各界でも東北に対して比較的適切な評価は乏しいのが現実です。そこで私は、夏徳仁主席のお誘いにより、私がこの博物館を作る中で得られた視点を皆さんにご紹介し、交流したいと思います。博物館長の立場から、私は東北の歴史について語り、また中国M&A公会の創始会長の立場から、東北の未来について、どうやったら東北地区振興の確信を盛り上げられるかについてお話したいと思います。

私が今日お話しするのは東北の5回目の勃興のチャンスについてです。多くの方がご存知ないのですが、東北はこれまで、4回もの経済の勃興があり、中国の歴史上、いやアジアの歴史上でもかつて先頭に立っていたのです。

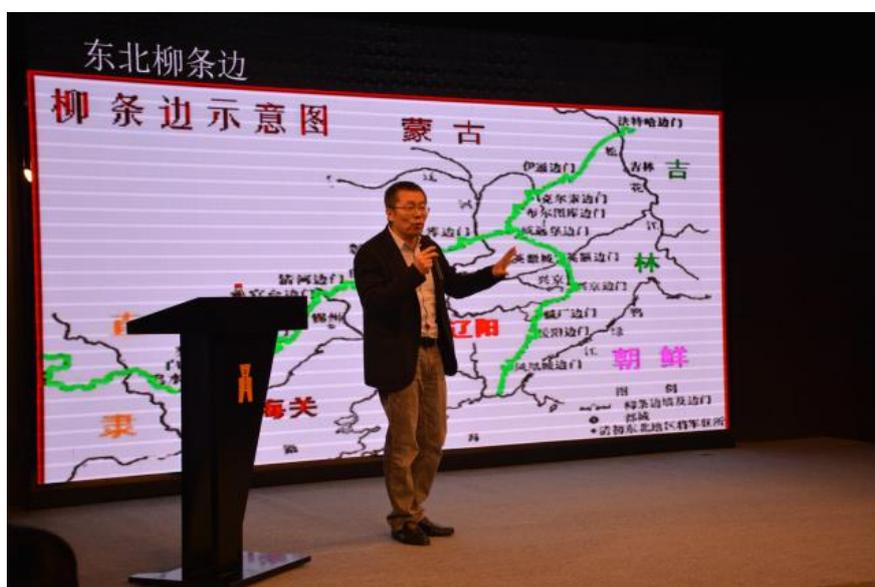
まず東北の土着時代を見てみましょう。国家や国境の概念というのは最近二百年ほどのもので、それより前は国家の概念というものはありませんでした。そこで私はこのような時代を仮に土着時代、と呼ぶことにします。紅山文化から、隋と同時期に繁栄した高句麗、更に唐と同時期に渤海国が繁栄しました。もちろんまだまだ沢山話題があります。例えば商の朝鮮支配などありますが、多くは伝説に過ぎ

ません。この時代の東北は漢文化とは違う、多くの少数民族により集落が形成されていました。それは我々漢族が主導したものではなかったのです。これが第一の段階といえましょう。

次に、皆さんもご存知の澶淵（せんえん）の盟があります。これは宋が初めて東北に係わったものですが、当時東北は遼がありました。遼は契丹により作られた民族国家で、宋との度重なる戦いを経て、澶淵の盟が結ばれ、それ以後、漢族はこの少数民族に常時貢ぎ物を送ってほぼ百年にわたる平和が維持されたのです。これが一つの境目と言えます。この、遼と宋の時代に、今我々が理解している東北の概念が形作られたのです。遼と宋の後、東北を支配したのは金でした。金王朝は女真人で、その次が蒙古人の元が現れました。明は一時期この地を占領したことがありましたが、厳密に言えば実質的な統治をしたわけではなく、屯田と通商活動を行っただけで、ヌルハチの後金が立ちあがり、再び漢人を追い払い、清朝人の満州となったのです。

早期の歴史を通覧すれば、二百年前の東北と漢人の文化は相当な距離があったと言うべきでしょう。辛亥革命の時代になっても、漢人の主流の人々は、東北は辺境の地でしたから、「東北辺疆」と呼んで、新疆と同様、よそ者で、野蛮の地と見ていたのです。孫中山は革命の時にも、この東北を何度も利用して、日本の支持者と交易をしていました。

清朝は東北に全面的封禁策をとっていました。康熙帝は、漢人が東北の地に入ると満人の風水が破壊されると考え、東北への立ち入りを禁止し、「柳条辺牆」（りゅうじょうへんきょう）を築いたので。この柳条辺牆は「人」の字の形をしていました。先にこちらの幹線を築き、次にこちらの支線を築きました。当時、瀋陽はまだ中心ではなく、中心は遼陽にありました。その後、瀋陽は奉天と呼ばれたのですが、なぜ奉天だったのでしょうか？それは、順治が北京にやってくるまで中国の皇帝になったとき、裏庭から火がつかないように、盛京に都を残して奉天と呼んだのです。それには北京を長く奉じ、安心してくださいという意味が込められていました。こうして東北の地は200年余りも封禁されたので、その間に形成された地域の文化も当然異なるものになりました。柳条辺牆の北側は蒙古族の土地で、遊牧民族の社会でした。南は吉林、黒龍江一帯で、漁撈・遊牧民族の土地でした。そして柳条辺牆の真ん中の土地だけが満族の文化の主流の地で、漢族の農耕文化を吸収したので、そこだけが比較的発展した奉天（遼寧）となったのです。その後、柳条辺牆はなくなりました。200年前にほぼ取り壊されたのです。なぜ取り壊されたのでしょうか？所謂「闖關東」（ちんかんとう。山海関を越え大勢の漢人が関東＝東北地区に移住した民族大移動）と開放の時代、東北の現代化の時代が訪れたのです。



では東北地方はどうやって現代化に進んだのでしょうか？それは3つの条約から始まりました。その1は中露ネルチンスク条約で、康熙帝時代に結んだものです。現在、我々の教科書では不平等条約となっていますが、実際当時としては比較的平等な条約で、ロシア側のことばでいえば、ロシアにとっては不平等だったのです。当時、ロシアは新興国家で、東への拡張の際にシベリアへと向かい、そして東北にやってきて、それから頻りにちょっかいを出してきました。その目的は狩猟で、毛皮や薬草目当てに、その後アラスカまで出て行きました。アラスカはロシア人が占領した後、アメリカに売ったのです。ロシアは当時、猟師らが縦横無尽にこのあたりを行き来し、それは毛皮目当てだったり、鮭などであったりしました。

ロシア人の満州族人への絶え間ない侵入と騒擾に対し、康熙帝の時代は国力も強大だったので、何度か小規模の戦闘を交え、こちらの軍隊は割合正規軍、相手はゲリラのようなものだったので、清朝は勝ち戦の結果、ネルチンスクでしっかり領地を固めるための条約を結び、およそ中露国境が決まったのです。どこが清朝かを画定したので、この条約は最初の東北地方に係わる国際条約となりました。これは大変重要なことでした。

1841年、アヘン戦争の後、ロシア人は中国が弱いと見るや、再び侵略を試みました。人の弱みに付け込んで、清朝は外国人にやられて臆病になっており、ロシア人にちょっと脅されただけですぐ降参してしまい、愛琿県で条約を結びました。これがアイグン条約（1858）で、黒龍江の北側の広大な領土を割譲したのです。その二年後、北京で三番目となる北京条約を結び、ウスリー江以东のこれまた広大な土地を割譲してしまいました。かつて、我々の大東北は本当に広大でしたが、この2つの条約によって、清朝は大きく領土を失いました。あの当時は結局勝ち負けがものを言う時代、軍事が第一でした。もちろん民族の立場から言ったら、我々からすればきわめて不平等ですが、当時としてはなにも打つ手がなかったのです。だから、中露ネルチンスク条約は初めて領土を画定したのですから、平等不平等の次元ではありません。ただその後の2つの条約は、確かにロシア人が我々から略奪し、東北地方の北部が限定されてしまいました。

そして、その後東北に影響を与えた戦争がふたつあります。それはまず中日甲午戦争（日清戦争）です。中国の現代化に本当に影響を与えたのはアヘン戦争ではありません。アヘン戦争は1840年、当時情報伝達的手段などにもなく、数十年経ってから全国の普通の人が、いわゆるアヘン戦争というものを知ることになったのです。アヘン戦争ということばは、北伐の時に、列強討伐のためにはじめて大々的に広めた現代の言葉です。本当に中国人に国恥という意識を引き起こしたのは、中日甲午戦争でした。当時中国人は、中国は強大で、ちっぽけな日本など倭寇じゃないか、ちびの倭人と戦ったら中国が勝つに決まっていると考えました。しかも当時、30年もの洋務運動の最中で、李鴻章、曾国藩、左宗棠が主導し、中国は国力の最強、世界第四の大国だったのです。日本人が言いがかりをつけてきても、我々誰もが、大清帝国必勝、日本完敗を確信していましたし、世界中がそう思っていたのです。だから当時、たくさんの人々が中国の開戦を支持し、日本の多くの人々も大清必勝、大和の国はたぶん負けるだろうと思い、ただ負けるにしてもしっかり戦って、民心を高揚させようぐらいに考えていました。

結果は予想外、我々は完膚なきまでに打ちのめされました。中国の民族の恥辱、国全体が震撼したのです。今日に至るまで、中日間に残る憎しみは、この中日甲午戦争に始まっているのです。中日甲午戦争の最も核心的な結果は何でしょうか？我々は「東三省」（※清朝当時「東三省」と呼称。講演主旨を考えここでは日本語もそのまま）全てを日本に割譲したのです。ロシアはこれでアジアの海への出口が

なくなることを心配し、そこでドイツとフランスと語らって、三国で日本人に東三省を返せ、返さないなら戦うまでと迫りました。日本は勝ち戦で台湾、澎湖諸島、東三省を得て祝賀ムードだったところに、いきなり三国の強敵が現れたのです。日本人には次の戦いをする余力はなく、仕方なく東三省を返還したのです。国際法上、東三省は日本人に帰属していましたが、ロシアの干渉で、再び戻ってきたわけです。

東北三省が戻ってきたので中国はロシアに感激し、李鴻章はすぐさまロシア人とモスクワで中露密約（1896）を交わしました。ロシア人は1891年からシベリア鉄道の敷設を始めていましたが、海への出口がありません。西の出口はバルト海で、スウェーデンと戦わなければならない。東にはまだ出口がなく、中国の海參崴（ウラジオストク）まで引こうとしていました。ただその途中で国境を迂回するとなるとコストもかかり、工事も難しいので、ロシアは東三省を横断する鉄道、つまり中国東方鉄道、中東鉄道を敷きたいと要求してきたのです。李鴻章はすぐ同意しました。中露密約には3つの内容、つまり中国とロシアの同盟関係、ロシア人に東北を貫く鉄道敷設を許す、露清銀行を作りロシア人に鉄道融資を任せること、今から見れば全て不平等な内容でした。これが中露密約だったのです。

東北が中国の手に戻る結果となり、日本人はやり場のない怒りに震え、さまざまな口実を見つけてはロシアに戦いを挑み、その結果1904～1905年の2年間の日露戦争が起きました。日露戦争は主に東北地方で戦われました。今教科書では中国で戦われたと書いていますが、当時、漢人は東北が中国だとはまだ考えていなかったで、ここでは東北の土地で戦われた、としか言えません。清朝政府は心の中では日本人を支持しました。どうしてでしょうか？それは、これまでロシア人にあまりにもいい思いをさせていすぎたことに気づいたからです。しかも中国国内では李鴻章を攻撃しました。というのも李鴻章とその息子が汚職に手を染め、500万テールの銀を手に入れたからです。が、ちょうどそのとき、李鴻章はこの世を去ります。また同時に、中国の留学生が、およそ10万人もの留学生が日本で勉強していました。当時国全体から見ても、若い世代は日本を支持していたのです。（甲午戦争で敗戦し）失敗してはいましたが、やはり日本をお手本にしようとしたのです。日露戦争では結局日本がロシアを打ち負かしました。これはアジア人が始めて欧州人に勝利した瞬間で、中国人もこれを祝ったのです。

ロシアが負けてから、セオドア・ルーズベルト（ローズベルト）が調停し、アメリカのボーツマスで和議を結びと同時に、日露間でもすぐに密約ができました。どんな内容でしょうか？すなわち、我々双方が手を組んで、一緒にアジアを分割しようじゃないか。朝鮮は日本にやるから、蒙古はロシアがもらう。そして東三省は南満と北満に分けて、南満は日本、長春から北はロシアがもらおうと。つまり、日露が東北で勢力範囲の分割を実現したのです。

さて、ここで辛亥革命についてお話ししましょう。辛亥革命の志士たちは、東三省を中国だとは見ていませんでした。しかもスローガンでは韃虜（※満州人の蔑称）を駆逐すべし、お前たちは満州へ帰れ、と主張したのです。つまり漢族の主流は、東北が自分のものだとは認識していなかったこととなります。今日、我々は、東北は自分たちのものだと言っていますが、当時、辛亥革命の志士たちは決してそうは考えていませんでした。孫中山も含めて。皆さんは彼が売国奴だ、東北を売ったのだ、何度も条約で東北を日本人に売り渡したのだ、と言いますが、彼は「あなたたち（※日本）のものだ」と思っていたわけなので、一向にかまわなかったわけです。これが東北をめぐる、大きな歴史の流れでした。

ここで、東北は最終的に、法律上中国に帰属することになったのですが、これについては感謝すべき人物がいます。それは張学良です。張学良が鞍替えをした時、蒋介石に帰順したからなのです。もし蔣

介石でなく、日本に帰順すれば、東北は日本のものになっていたでしょう。ソ連に帰順すればソ連のものになっていた筈です。独立の可能性だってあったでしょう。だから、これは張学良の大きな貢献というべきでしょう。

四回にわたり全国をリードするかに

第一回の勃興

主要人物はまず趙爾巽（ちょうじそん）です。かれはかつて財政部長も務めた、我々遼寧省の鉄嶺の人で、四人兄弟から総督が二人も出ました。弟は趙爾豊、皆さんご存知の辛亥革命の重要な前提に「保路運動」がありましたが、その中で趙爾豊は四川の民衆を鎮圧し、ついには殺戮に及んだため、辛亥革命成功後は殺されました。（兄の）趙爾巽は東北で総督をつとめ、東三省を治めた満清最後の総督でした。当時、ロシアと日本が東北の鉄道利権を争っており、ロシアは東北を横断する鉄道、ちょうど丁の字の一部分がロシア人の管理するところで、縦の部分の長春から大連までの区間を日本が管理していました。趙爾巽はそこで、中国自身の鉄道を急いで作るべしと主張しました。北京—奉天鉄道を中心として。

日本人は大連港をおさえ、中国は錦州、營口の二港をおさえていました。營口は民間、錦州は政府のもので、趙爾巽は大豆の生産を全力で進めました。一時、東北地方の大豆はかつて世界の60%のシェアを誇るまでになっていました。しかも当時、欧州の主な工業や、戦争、更に一般家庭でも油が必要で、当時は東北地方の大豆、毛皮といったら大変なもので、東三省全体の経済は当時の全中国をリードしていました。

皆さん、博物館（瀋陽の中国産業金融博物館）の展示に「古瓷巻煙廠」（古磁器印紙巻タバコ工場）があるのをご覧いただけと思いますが、これは英国人が1911年に中国で始めたものです。今日は瀋陽文書館の荊紹福館長がおいでですが、その資料はもっと充実しています。さて、この趙爾巽という人物はたいしたもの、私も彼の展示室を近いうちに作りたいと思っていますが、晩年『清史稿』を著し、文化人としてなくなった、大変立派な東北人です。

さて、鉄道に話を戻します。当時、ロシアは海への出口を欲しがっていました。だからこの鉄道をシベリア大鉄道と呼んでいました。日露戦争もこれと関係します。シベリア大鉄道と中東（中国—東北）鉄道は中国の近代化、特に東北が近代化に向かった重要な起点なのです。



本博物館ではかつてアヘン戦争の展示もしました。アヘン戦争は帝国主義による侵略であると我々はみな承知していますが、一方でマルクスはかつてこう言っています。即ち、アヘン戦争は封建専制制度による現代文明への封鎖を打破したのだと。実際、別の角度から見れば、アヘン戦争は開放の起点とも言えます。この鉄道の敷設は、一面では東北に対する略奪ですが、他の一面から見れば、もしこの鉄道がなかったら、チチハルも、大連も、ハルビンもなかったでしょう。大連はわずか100年前にはまだ「青泥洼」（チンニワ）という小さな漁村に過ぎませんでした。ハルビン、大連、長春はいずれも鉄道があってはじめて誕生した町です。現在、東北の80%の都市はみな鉄道と関わりがあり、鉄道がなかったら何もなかった筈なのです。当時、張学良は一人で300機もの飛行機を買って瀋陽においでいました。1920年代当時、300機もの飛行機があったのです。皆さんご存知の瀋陽飛行場です。それから、東工大学も、当時全国レベルでも各方面でリードしていたのです。

東北第二回の勃興 張作霖、王永江時代

当時、王永江は袁世凱に見出されました。袁世凱は会って一目で気に入り、朝廷に入れて任用するつもりでしたが、清朝が倒れたので、結局張作霖みずから使ったのです。雇われてすぐ、王は奉天の高速成長を成し遂げました。この高速成長とはどんな状況だったのでしょうか？当時（の経済）は主に戦争、金融と鉄道の三本の道で、彼は鉄道敷設に力を入れ、七、八本の地方鉄道を敷いたのです。また、彼はもっとも早い段階の金融家で、個人による銀行創設を促し、通貨を統一し、奉票（奉天の通貨）を発行しました。奉票は当時、韓国、日本でも流通し、全東三省やロシアでも奉票が通用するほど、力があったのです。その後、宋子文が蒋介石を補佐した時にも王永江を真似したものです。王永江は遼寧で張学良を補佐して、二回もの戦争をしましたが、すべて債券、紙幣の発行に依存しており、また同時に鉄道建設があったのです。この時期の発展はたいへんな速度でした。これが張作霖時代です。

東北の第3回の勃興は偽滿州国時代

14年間に亘る偽滿州国時代に、東北の経済は大きく発展しました。日本人は鞍山に鉄鉱山を発見し、間もなく撫順に近代的炭鉱を建設しました。そして鉄鉱山、炭鉱を連動させ、一大鉄鋼産業としたのです。更に全ての交通、今日の京大線（※北京-大連）など全て日本人が当時建設したものです。つまり電気から機械、製薬、農業、屯田事業など全ての産業にわたるのです。野蛮に中国を侵略した関東軍以外に、およそ30万もの日本人が進んだ農業技術を東三省に持ち込み、農業開発を行ったの

です。今我々が食べる東北ブランドの米も、日本人が栽培したものですし、殆ど大豆が改良されたのも日本の技術によってです。もちろん、それは戦争遂行のためであり、侵略戦争であったわけですが。

「7.7 事変」(※盧溝橋事件) 後には、全国範囲の侵略戦争となっていきました。当時、この戦争経済が東北(経済)をリードしていました。ですから、この時代の満州国経済は非常に発達していたのです。ではどの程度発達していたのでしょうか? 1943、1944、1945年の3年間の統計を見ると、満州国経済はアジア第1位、日本が第2位で、日本の本土経済を凌駕していたのです。

中国はどういう状況だったかといえば、1945年の統計によると、中国の85%のGDP 経済総量は東三省で、ほか10%が台湾、その他地域が5%でした。最初、私はこのデータを見て本当に驚きました。東北にかつてこんなに輝いた時があったのかと。当時日本との航空便は中国内地では一日1便だけだったのに、東三省では毎日東京、大阪、漢城(現ソウル)から丹東、瀋陽、ハルビンへ毎日定期便が運行するほど、発達していたのです。

第四回の勃興、共和国三十年

この時期は、皆さんよくご承知のとおり、「遼老大」(遼寧が兄貴分)の時代で、遼寧は工業の全ての分野で遥かに全国水準を超えていました。共和国は我々東北を資源大省、重工業大省、そして軍備大省と位置付けました。戦争には頼もしく、我々はいつでも戦える準備をしており、抗米援朝であれ、対ソ連戦であれ、更には全国の資源建設のためにも、みなわれわれ東北が準備をしたのです。東三省は軍備経済であった、この点は大変重要です。我々は戦争の準備ばかりしていたので、軽工業には手つけられず、また国民の消費生活にも頓着していませんでした。今日、市場経済は、案の定我々の東北ではなく、南方がずっと消費経済を発展させていた結果、彼らにリードされることになったのです。とまれ、これが第四回の勃興期でした。大づかみでいうとこのような感じです。

東北はなぜ勃興できたか? その原動力はどこに?

第一に、開放

東北がまず開放したのは、真の意味での産業の対外開放でした。当時、南方の十数都市の開放は通商上の開放であったのに対し、我々東北では本当の意味での系統的な産業の開放であり、それはまず鉄道敷設から始まったのです。しかも全面開港で、東北の三十数都市は全て、1860年には全部開放されました。つまり今の自由貿易区です。当時、趙爾巽に始まり、王永江になって免税となり、無税で随時貨物が入ってきました。当時の東北の環境はなぜ特別有利だったかと言えば、我々のここでは殆ど税がなく、百万以下の商品は無税、百万を越えてはじめて徴税対象となりました。当時、全中国で百都市が開放されていましたが、その三分の一は東三省にありました。中国で最も開放的な都市は東北にあったのです。

「闖關東(ちんかんとう。東北への人口大移動)」は人類史上の一大壮挙といえます。1850年、東北の人口はどの位だったのでしょうか? 三百万人でした。その後、1950年には東北人は四千万人に。つまり、百年のうちに、三千七百万人が東北に移り住んだことになります。闖關東。水路、陸路を辿って三千七百万人も人類大移動が行われたのです。アメリカと比較してみましょう。アメリカの民族移動はどうだったか。やはり同じ100年間、1820年から1920年までの間に、三千二百万人が移動しました。我々より五百万人少なかったのです。つまり、人類近代の大移動といえば、まず闖關東があって、アメリカはその次、更にその次が闖南洋(南洋への移民)でした。南洋への移民は、広東から一千万人、現在の東南アジアの華僑全体で一千万人です。この他にアメリカ、南米に向かった労働者が約二百万人いました。

人口移動は文明の進歩の重要な部分です。当時、開放とは人に対する開放であり、闖関東、産業への開放、すべての市場における開放、これらは最も重要なモーメントだったので。

第二に、改革

趙爾巽の最初の改革はまず遼寧からスタートしました。彼は約 300 万ムーの清朝皇室所有地の全面改革に着手し、これを「旗地徴税」と呼び、3,000 万ムーを払い下げました。彼の言い分としては所詮、皇帝の所有地は開放しなくても外国人に持っていかれるのだから自分が先に開放する方がましだということで、土地を売り始めたわけです。東三省の土地の私有化。なぜ皆が東北へ大移動したかといえば、行けば土地の所有が可能だからで、だからいっぺんに国有地を売り出した、大規模な土地の売買は趙爾巽の重要な土地私有化です。さらに、銀行の開設です。趙爾巽が作った東北官銀は、袁世凱に学んだものです。袁世凱は天津で最初の官銀を設立しました。その後、趙爾巽が瀋陽で最初の東北官銀を設立し、その後、財政を統一しました。それまで東北にあった数十カ所の財政税収をすべて統一し、瀋陽の5つの役所を廃止して一つの財政局に統一したのです。

そして関税を統一しました。アヘンを徴税の対象にしました、所詮排除できなかったのです。さらに、趙爾巽は公開で官職を売り始めました。一番すごいのは、自分の弟趙爾豊に売ったものです。趙爾豊は勉強ができず、試験にも落第し、最後、30万両の白銀で兄から官職を買って四川省に赴任し、四川で亡くなっています。東北は見渡す限りの荒れ地で、何も無い場所だったので、いっそのこと、土地を売り、官職を売り、アヘンから税を取り、売春婦からも税を取りました。これは趙爾巽が始めたことです。これが当時の改革でした。

第三：計画経済

東北は一貫して計画経済であり、且つ軍事体制でした。張作霖が始めたのがまさに計画経済です。王永江と張作霖の関係は、宋子文と蒋介石と同じで、宋子文は三回罷免されましたが、王永江も二回罷免されています。ただ、60歳前に若くして亡くなったのは非常に惜しいことでした。東北は一貫して計画経済であり、市場経済は存在しませんでした。満州国も含め軍事体制でした。従って、東北の人々は計画経済に非常に慣れているのです。百年以上も計画経済でやってきていて、土豪、軍閥、日本人の時代からわが共和国に至るまで、すべて計画経済で、これが東北人の根強い観念なのです。

第四、東北の安定した発展環境

東北という社会は大きな動乱が一度もなく、日本人の頃にも動乱はありませんでした。というのも、彼らは主に山海関以南で戦争をしたからです。東北の数次にわたる動乱は、一度は義和団との衝突で、帝政ロシアの東北進出は義和団が原因でした。ご承知のとおり、義和団は山東、山西で災いをなしましたが、最も被害を受けたのは東北でした。義和団は主に鉄道を破壊しましたが、ロシアが東北に敷いた鉄道を破壊しました。ロシア人は苛立ち、ちょうど八国連合が北京に入った際にロシアが提起した条件とは、東三省全体の鉄道を中国に破壊されたのだから保護が必要だといって、13万人を東北に入れ、鉄道沿線 1,000 平方キロの土地をすべて鉄道附属地とした、鉄道沿線はT字部分から大連までです。もう一度は9.18事変（※満州事変）です。日本人は6ヵ月で東北を占領し、張学良は撤退しました。さらに一度は、ソ連で、1945年の戦勝後、東北から撤収せず、瀋陽、長春、大連でおよそ取り外せるものをすべて戦利品として持ち去りました。これは非常に大きな災害でした。

これらを除けば、東北全域は比較的安定し、人々は政治にあまり関心を持ってこなかった。故に比較的安定した発展環境があったことが東三省の特徴といえるでしょう。東北は4度に亘って全国をリードしました。これを支えたのは全面開放、徹底改革、計画経済と安定した発展環境でした。これが、過去100年間、東三省が相対的に特殊であった原因です。

現在、東北の困難に対し、多くの処方箋が出されています。その中には、計画経済体制が良くない、と言う指摘があります。よろしい、それなら海外ではどうだったでしょうか？ マンチェスターはイギリスの工業の都、ルールはドイツの工業地帯で製造業の都、デトロイトは自動車の都でした。かつてはそれぞれの国で50~100年もトップに君臨していたリーダー都市でしたが、今日ではすべて没落し、救いようがありません。今、この3都市はお話になりません。もし、計画経済は良くない、市場経済は良いというなら、なぜ、市場経済であってもこの問題に対応できなかったのでしょうか。これは体制の問題ではない、ただ単に体制の問題ではないのです。

東北の人は駄目だという指摘もあります。でもそうだとすれば、なぜ、東北は過去4回も勃興できたのでしょうか。しかも今日の深圳、海南等で活躍している人材の多くは東北人です。ですから東北人の問題ではありません。一方、政策の問題だという指摘もあります。けれど、中国の政策はみな同じです。なぜ、ここでは良く、あちらでは駄目なのでしょう。さらに、気候が良くないという指摘もあります。確かに寒冷なことは問題ですが、しかし50年前の当時、現在、気温は100年前より暖かくはありません。同じ寒冷の時代に、オランダ、デンマーク、カナダには多くの良い工業のモデルが現れました。すべての処方箋がそれぞれ正しくても、その中で問題を解決できる処方箋は一つもない、ということがあるのです。社会経済は非常に複雑なのです。

まず、我々は歴史に自信を持たなければいけません。一つの事例を挙げましょう。20年前、私が瀋陽にいた時、東北製薬総廠が改造されることになりました。東北製薬総廠の前身は日本の武田製薬でした。武田製薬はその後非常に発展し、満州国時代には大企業に成長しました。中華人民共和国建国の時に半分に分割して、上海に持って行った半分が今の上海医薬集団です。1960年代に「三線建設」で更に半分にし、四分の一を湖北に持って行ったのが湖北医薬集団です。1980年代の経済改革で更に半分を石家荘に持って行き、今の華北製薬ができたわけです。一つの東北製薬がこれほどに分割され、それらが中国の十大製薬会社になりました。もとはすべて東北製薬から派生したのです。

同様の状況は機械製造、テレビ、電器、鑄造業界にもあり、各業種で同様のことが繰り返されましたが、殆ど東北から派生したものでした。一枚の図でみることにしましょう。これは瀋陽という一つの都市の1950年~1980年の全国建設支援マップです。瀋陽は、全国各地の100余りの企業を支援しましたが、現在、この内の30社が上場しています。これらの会社はすべて瀋陽からの支援でできたものです。こうした企業、当初まったくなかったのです。瀋陽から派遣された労働者、設置した設備、売った製品、そして市場であり、すべて瀋陽が支援していた、瀋陽という一つの都市がこれほど多くの企業を支援していたのです。これらは現在では瀋陽と関係がなくなりましたが、当時はすべて瀋陽から孵化したものでした。歴史を忘れてはいけません。我々は曾て光輝いていたのです。



今の問題をどのように見たらよいでしょうか？東北の問題は体制の問題ではなく、人の問題でもなく、政治の問題でもなく、寒暖の問題でもありません。私は、東北は「更年期」の問題であろうと考えます。更年期の特徴は皆さんご存知のとおり、その年になれば問題が出てくるものです。苛立ち、不安定、すぐ変わる、何を見ても具合が悪い。しかし、更年期に上手く対処すれば、彼は叡智にあふれ、沈着冷静で、能力の高い人となります。東北の問題は、私は今まさに更年期の問題だと認識しています。

ここで二冊の本を推薦します。それは、イスラエルの研究者による「Sapiens : A Brief History of Humankind (サピエンス全史)」とアメリカ人による「The Singularity Is Near (シンギュラリティは近い)」です。「サピエンス全史」の核心概念は、人類はフィクションを作ることができるが、筋の良い物語を見出さなければならない、その物語は人に感染し、感動させ、呼びかけるといものです。フィクションを語る能力を失ってはいけない、今我々は既に社会全体の世論に壊され、東北人は想像することすらできなくなり、誰かに言われたとおりにしか行動できない。これは大問題です。だから、我々は歴史をもう一度見直さなければなりません。趙爾巽が東北に来た頃は一面荒涼の大地で何もなかった、彼は如何に想像したのか。時代にはその時代の想像力があります。だから私は皆が直視して、自信を引き出す必要があると思うのです。

同様に、「シンギュラリティは近い」が我々に伝えたのは、今日の社会は従来とは違っており、技術や知能の進歩は、科学技術が我々をコントロールできる社会の創造をもたらす、従って、どのような枠組の中で発展するかを改めて判断しなければならない、ということです。

人材。今日、大量の東北人が去って、東北には人材がいなくなったのでしょうか？そうとも言えません。一つの時代にはそれぞれ異なる人材がいます。一つのエピソードですが、私は1993年に留学から帰国、当時の欧米留学同窓会に招聘され、講演しました。私の他に北京大学の王選先生も講演したと記憶しています。多くの方が、自分たち帰国留学生は一流の人材だから国に貢献すべき云々と特別に強調していました。私は不安を覚え、講演の際、冗談半分でこう言いました。家の人々が皆いなくなったら、この家は普通衰退するでしょう。でも、それでは何故、我々が海外留学期間中、中国経済は突然勃興したのでしょうか？これは少なくとも我々が一流の人材とは言えない、ということを表しているの

はないでしょうか？と。それで、私は幹事候補だったのですが、落選の憂き目にあってしまいました。しかし、異なる時代と異なる環境では、人材の定義と人材に対する需要は違います。

破壊的イノベーション。これは空疎な言葉のようですが、実は空疎ではありません。現在の社会は体験型社会です。過去においては、すべての生産、消費、資源配置はみな統治された社会であり、中央の指導に基づき、少数の上層が発展し、生活し、生産するかを設計していました。しかし、今はそうではありません。今は体験、つまり消費者だけが決定権を有し、消費者の体験に沿って生態圏を組み替え、経営・生産を作り直す、すべて変わりました。しかもこの体験は我々ではなく、80年代生まれの人の体験であり、中国の4億人の80年代生まれが今の中国の主人公です。

今、我々が見ている東北は、我々の視点で見ている東北です。では次の世代はどのように見るでしょうか？彼らには発言権があるでしょうか？次世代の東北人、また次世代の他の地域の中国人はどのように見ているでしょうか？我々の目に映っているのは自分の世代の人ばかりで、伝統的な思考方法によって、東北は衰退しているとしか見えていません。まるで前世の生き残りの老人や古い時代に恋々としていた若者など頑固者の観念です。私は50代以上の方が主催するフォーラムにはあまり出たくありません。左派右派に関係なく、私は80年代生まれが主催するフォーラムが好きです。彼らが何をしゃべっているのかを聞きたい。次世代の中国人は我々より明るいと感じるし、我々より選択肢が多く、毎回彼らの活動に参加すると非常に心が躍ります。中国には希望があると感じています。ところが、私のような年代の人たちが主催するフォーラムに出ると、とたんに永遠に問題ばかりなのです。

世代のギャップが現れています。次世代は体験型経済、シェアリング経済であり、彼らはもう自動車を買わず、シェアする。この世代は違います。今、新しい業種が出現しています。中国の一千万人がテイクアウトや配送業に従事しています。5年前、こうした業種があったでしょうか？銀行の大量のレイオフで3~5年後に銀行の人は大変な目に遭うでしょう。なぜなら、すべての若者の銀行は携帯電話の上にあるのです。時代は変わりました。ネイル業界には、どれだけのネイリストが働いているでしょうか？皆さんご覧のように、滴滴（ディディ。配車アプリ）、クリーニング、ケータリングなどを含め、多くのビジネスが5年前には聞いたこともないのに、今では主要業種です。アリババは15年前にはパテンだと言われました。今はどうでしょう？バイドウ（百度）はどうでしょう？すべて変化しています。どのような視点で見たらよいのでしょうか？我々から見れば、彼らは大きなトレンドをひき起こすことは出来ないだろうと思われるのですが、しかし、もしこの業界内で生活し、体験したのであれば、東北に対する見方は変わるでしょう。立場を変えて改めて東北を見ると、次世代の、選択ができる人をお願いしなければならない。我々の世代には選択肢がない。我々は功利主義です。我々の世代は役に立つことしかしない、学ぶのは役立てるため、役に立たなければしない。しかし、問題は、人生はすべて役に立つだけのためにあるのかということです。

スティーブ・ジョブズはインドに暫く滞在しましたが、最後どうなったでしょう？iPadが誕生しました。彼はインドから靈感を得ました。我々世代は判りません。我々は功利主義が強すぎ、そのため東北は発展できるのか、進歩できるのか、すべて極端的な功利主義の目で見て判断しています。GDPが生まらせるのか、人材を留め置けるのか。しかし問題はそこなのでしょう？なぜ、東北全体が100年も続くビッグマシンとなり、筋肉隆々でなければならないのか？その必要があるのでしょうか？東北が一時的に遅れることがあったとしても、それは絶対に悪いことなのでしょう？人には一時的に更年期があってはいけないのでしょうか？

国全体としても同じです。我々は今お金持ちになった。筋肉もついた。でも脳味噌はどこにあるのか？価値観を持っているのか？我々はいま「一帯一路」と言いますが、我々はどんな価値観をグローバルに提供できるのか？ここはぜひ検討に値するところです。ですから、改めて東北に注目すべきなのです。

結論はありません。ここで皆さんとともに、角度を変えて、次世代の考え方で東北を見るとどうでしょうか。東北には輝かしい時代がありました、そしてまた輝くだろうと信じています。ただ、この輝きは我々が慣れ親しんだ輝きではないだけです。去年、私は国の政治協商会議の3人の副主席の前で発言しました。何人もの専門家や指導者が東北を批判した後だったので、私の話はかなり感情をあらわにしたものになりました。私はこう話しました。東北がこの国に行った最大の貢献は何でしょうか？2000万人の労働者階級がリストラ後、再就職を果たしたことです。2000万人の労働者階級はどのくらいの力があるのでしょうか？もしほかの地方だったならとくに騒動になっていたでしょう。しかし東北は国に負担をかけたのでしょうか？これほど大きな工業都市が突然国の政策、経済構造転換により淘汰されて、それでも動乱も起きず、まだ中国に留まっているのですよ。これが東北の中国への最大の貢献なんですよ、と。若くして全国に献血したのに、年を取って弱ったら見捨てられるのでしょうか？だから、問題を見ると、東北に対して、比較的公平な評価があってしかるべきではないでしょうか、と。

第一、東北は、時代を超えて Financial Ecology、インターネット金融・ビッグデータ・人工知能・ブロックチェーンを研究すべき

2週間前、私は北京と上海で、金融テクノロジーとブロックチェーンのセミナーを開催し、11名の部長（大臣）が参加しました。皆、未来の金融テクノロジー、それが我々の未来をどう変えていくのかに関心があるのです。我々が東北の苦境を語っているとき、彼らはこうしたことに熟慮を重ねていたわけで、1100名の全国各地のエリートが北京、上海に集結して3日間会議をしました。我々は彼らが何を考えたのかを感じ取らなければなりません。また瀋陽は、東北はカーブで前車を追い越すことができるのでしょうか？できると思います。しかし、毎日生活のために、人が我々を非難することに、がんじがらめにならないようにすべきです。我が東北は、長い期間すばらしかった、風水が転変して、たかが数十年不甲斐無かっただけです。従って、我々は如何にして今後カーブで追い越せるかを考えなければならない、チャンスを再び失うことはできません。

第二：M&Aを推進しよう

私は何度も M&A について述べてきました、M&A とは価値を上げることだと。我々には、まだ大変多くの資産が活用されておらず、これを必ず活用しなければなりません。M&A を通じてさらに大規模の M&A を展開するべきです。現在、中国 M&A 公会は 12 省に分会を設立し、去年はここ瀋陽で開催しましたが、夏徳仁主席、潘利国主任ともに出席いただきました。去年は第 1 回で、今年第 2 回東北 M&A 総会を開く予定です。すべての価値は活性化すべきで、活性化できなければ死んでしまいます。資産はそこで沈んでしまうと死んだも同然、活性化させなければなりません。

なぜブロックチェーンを検討するのか？ペルーの経済学者デ・ソトは、ペルー人はそんなに愚かではないのに、なぜ我々は発展できないかを考え、最終的に一つの理論を提起しました。20年前に「資本の秘密」という本が出版され、非常に売れました。重要なポイントは、人はみな資産を持つが、発展途上国の資産は財産権という標識が形成されていないので、結果、取引ができず、移転ができない。私の牛、私の豚小屋、私の家は証券化されない為、私の資産は永遠にそのまま。しかし、西側では、すべて

のものには標識がついており、どの資産も証券化できるので、すべてのものが取引できる。取引があつて初めて経済発展が創出され、取引がなければ、どんな良いものでも、例え金でも一文にもならない。今、ブロックチェーンのおかげでコストが大幅に低減され、取引が広い範囲で行われている。彼は世界ブロックチェーンのキーマンなのであり、中国の幾つもの都市が彼を招請し、貴陽の書記もわざわざ彼を貴州へ誘ったのです。それもいかに取引を作るかのために、だから M&A は非常に重要なのです。

東北で M&A の話をすると、人々はすぐそれはだめだ、不良資産だからと言うのです。不良資産という翻訳は間違いです。英語では、暫時効用を発揮しない資産であるのに、我々は不良資産と訳したので、道徳的な批判が出てきてしまった。不良少年、不良事件、不良家庭など、これら不良は道徳的評価なのです。実は、一つの資産が、あるときは効用を発揮し、あるとき発揮しない。しかも経済発展が速ければ速いほど、不良資産は必ず増えていきます。我々がそれを道徳的な事として見るため、結果、不良資産の発生を横領問題、体制問題、政策の過ちの問題だと捉えてきましたが、実はそうではなく、技術の進歩こそが不良資産を作り出したのです。

たとえば携帯です。私は iPhone6 ですが、それなら iPhone4、iPhone5 はすべて不良資産です。どこも壊れてはいないのに。今日、赤いスカートが流行っていて、翌日流行が紫になると、赤いスカートはすべて不良資産になる。東北はこういう不良資産が一番多いのです。今も憶えています、その当時、不良資産の処理法をマスターしなければならないという話をよく聞きました。私は、そのように考えてはいけない、所有者が異なれば不良資産も異なる。多くの人々の不良資産は他の人たちにとってはごちそうです。あなたが無用だと思ったものが、他の人は非常に気に入るかもしれないし、ほかの地方では手に入られないものかもしれない。だから、東北の大量の不良資産は、あるグループに認可されなければ、他のグループに変えたらどうか、と思うのです。

第三：「一带一路」の焦点を作り出す

私は最近、一带一路金融展というのをやっております。東北も入れて、自分たちで一带一路圏を作りださなければなりません。一带一路は一つの点ではなく、連帯効果です。一带一路は東北にとって大事なことで、中国はここにきてもうほかの道はありません。我々はグローバル世界観を持ち、新しい戦略方式での問題解決をマスターしなければなりません。千年の間に五回の大事件がありました。十字軍東征は世界の異なる文化融合を促成し、500 年ほど前にコロンブスが新大陸を発見し、300~200 年ほど前にイギリス帝国が世界を征服し、50 年ほど前はマーシャル計画、そして、今は一带一路プランという、第五次の波です。

ダボス会議のときも私はこのように宣伝しました。世界中が変化している中、我々東北は一带一路で活躍できるのか？我々はその当時ロシアが大鉄道を建設した時にチャンスを掴んだ、李鴻章の貢献は巨大です。李鴻章がロシアに使いを出していなければ、東北は死んだままだったでしょう。この中露密約を締結し、大鉄道を東北に導入したのが、すべての始まりでした。

では、いかにして瀋陽で一带一路の焦点を作ればいいのでしょうか。

第一：観念を転換しよう

我々はこの博物館を作りましたが、皆さんにたくさん来ていただくことを期待しています。友人を誘い、見学に来て、東北の歴史を知って頂きたい。我々は東北経済史研究センターも設立し、奉天文化、奉天金融を研究している最中です。今はまったくの空白状態で、東北のことを理解している人は非常に

少ない。そして、私の見たところ、多くの本が日本語のもので、中国語の経済史を十数冊めくって見ましたが、互いのコピーばかりで、真のオリジナルは日本なのです。これまで多少は整理しましたが、本当に東北の歴史観を構築できるかどうかは、更にかかなりの努力が必要だと思います。

東北研究史なしに我々の考えるシンクタンクは成り立ちません。これは全部努力によって作るもので、厚み、重みのある文化を形成しなければなりません。ですから、私も、全国の専門家に一回、また一回とこちらに来てもらい、東北を、すなわち奉天の金融、奉天の歴史、まず遼寧と吉林から話をしてもらっています。多くの人が当時遼寧の大都市が奉天、遼陽、海城であり、大連などなかったことを知りません。東三省の大都市は奉天、それからチチハルで、ハルピンはまだなかった。大都市ですら全然違います。これは実に面白い、だから歴史がどう転変して来たかを見なければいけないのです。

第二：ツールを作る

中国 M&A 公会遼寧分会は瀋陽に設立され、M&A を行っている人たちが運営しています。同時に我々は M&A 基金を発起し、各地でたくさん行っています。瀋陽はいろいろな原因で未だに活性化しておりません。しかし、M&A 基金は必ず企業家の起業を推進すると信じています。我々は根気強くこのことをやり続けます。全国的に M&A が進んでいる中、東北は終始受け身です。

第三：市場

我々の最大の問題は市場が不足していることです。現在、取引所の設立が禁止されているので、我々が主導して民間の東北アジア投資交易会あるいは M&A 交易会という形を取るつもりです。民間の力で日本人や韓国人にも一緒に推進してもらいたい。委員各位にも関心を持って頂き、一緒にやることを願っています。

とにかく、東北は当時、国の辺境であり、李鴻章、趙爾巽らが中国の国際通路を開拓しました。我々は彼らに感謝しなければなりません。王永江、張作霖も含めて。東北は中華人民共和国にこれほど貢献しました。今は、更年期に差し掛かり、この時期にどう対処するか？他人が非難しても、怨んでも、気にすることなく、再び青春を迎えるために、何に拠るか？自分の根気ではなく、先輩たちの改革開放や最新の市場を勉強し、民間パワーで東北経済を推進するしかありません。

長く言おうと思えば長くもなりますが、短く言えば、ただ我々が夢を持ち、想像力を持って、共に努力すれば、私は東北経済の未来に確信が持てます。特に、皆さんが我々と一緒に、私も東北人ですから、我々一緒にもう一度我々自身の東北を作りあげようではありませんか。

ご静聴ありがとうございました！